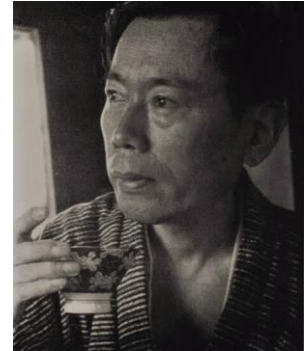


きたざわきよじ こうご 北沢喜代治『鶴凍えず』の表現を分析的に読み開く

1 はじめに

北沢喜代治は、明治 39 年（1906）長野県須坂町（現：須坂市）で生まれました。大正 13 年（1924）に松本高等学校に入学、卒業後は東京帝国大学へ進学しました。その後は富山県での教諭を経て、昭和 15 年（1940）に松本高等女学校（現：松本蟻ヶ崎高等学校）の教諭となりました。退職後は松本市議会議員を務め、また、松本市で文芸雑誌『屋上』を発行しました。

今回は松本市に縁の深い作家・北沢喜代治の代表作である小説『鶴凍えず』の表現を分析的に読み開きます。



北沢喜代治（旧制高等学校記念館蔵）

2 『鶴凍えず』のストーリー/プロットについて

ロシア・フォルマリズムと呼ばれる文芸理論の中に、「ストーリー/プロット」という考え方があります。小説で語られる出来事の総体を、時系列・因果関係にそって並べたものを「ストーリー」言い、その呈示のされ方を「プロット」と言います。

ストーリー/プロットのことを説明する際によく用いられる例は推理小説です。推理小説内で起きている出来事を時系列（ストーリー）に沿って記述するなら、冒頭から加害者と被害者とその事件について語られるはずですが、冒頭で犯人が分かってしまうと推理小説として成り立ちません。そのため、犯人が分かるのが最後になるようにプロットが組まれています。

『鶴凍えず』をストーリー/プロットの考え方をいながら読んでいきます。

2-1 『鶴凍えず』のストーリー

この物語の主人公であるすみ江は、幼い頃、松本市で母親と母親の情夫に、芸者屋へ奉公に出されました。そして、14、15 歳のときには、芸者として二人を養うようになります。信州、新潟、富山などでの芸者生活は、運命のさだまらない幸薄いものでした。こうした中で、母親が実母でないことを知り、すみ江は衝撃を受けます。しかし、すみ江は、母親の素性を知っても、母親と別れることはありませんでした。太平洋戦争が始まったのち、すみ江は結婚しますが、その結婚生活も幸せなものではありませんでした。その後のことはすみ江にとって「どんなふうに語っていいのか、その方法が分からない」ことであり、多くは語られずに、この物語は終わりを迎えます。

2-2 『鶴凍えず』のプロット

『鶴凍えず』冒頭には、語り手であり、中年となった現在のすみ江が登場し、自身の半生について語るという手法をとっています。

つまり、起こった出来事（ストーリー）の順に記述されるのであれば、結末に登場するはずの現在のすみ江が、冒頭に登場しているのです。

では、なぜそうしたプロットが採用されたのでしょうか。『鶴凍えず』の冒頭では、現在のすみ江が次のように話しています。

もし神様というようなものがあるなら、わたしはわたしの、ずっとこれまで生きてきた道を、その前に膝まづいて、申し上げたいのです。[中略]わたしは小説というようなものは、余り好きではありません。それは作りごとだと思うからです。それよりも、たった一度しか生きられない人生を、どのように生きてきたか、そういったことを、神様の前に報告するような、そんなお話をわたしはお聞きしたいのです。百篇、千篇の小説よりも、わたしには、そういった一つのお話の方が、しみじみと人生を考えさせてくれるからです。

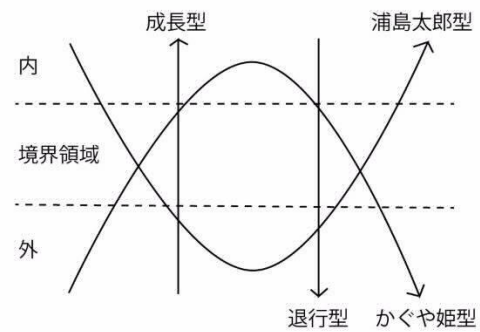
小説内の登場人物であるすみ江が、「小説」を「作りごと」だとし、「たった一度しか生きられない人生を、どのように生きてきたか、そういったことを、神様の前に報告するような、そんなお話を」したいと述べているのは矛盾しています。しかし、このような内容を、敢えて物語の冒頭ですみ江に語らせることで、通常ならば「作りごと」である「小説」（『鶴凍えず』）を、なるべく「作りごと」として、読者に読ませないようにした（つまり、『鶴凍えず』を<作りごとでないもの>として読者に読ませようとした）のではないかと考えられます。

3 『鶴凍えず』の物語の型

島田杏花「『鶴凍えず』について」では、『鶴凍えず』を「モデル小説だと聞いたことがある」とし、北沢のモデル小説のルールの一つとして「時効になったことにスポットをあてて一つの世界をつくること」を挙げています。つまり、『鶴凍えず』ですみ江の人生の前半しか語られなかった理由は、<人生の後半についてはまだ時効になっていなかったからである>としています。

しかし、「時効になったことにスポットをあてて一つの世界をつくる」という北沢の意図に沿った読み方をするのではなく、『鶴凍えず』を物語の型にあてはめて考えるとどのように分析できるのでしょうか。物語の型については、石原千秋『読者はどこにいるのか』内で、次の5つに分類されると述べられています。

1つ目は浦島太郎型で、地上のある村（内）から海の中の竜宮城（外）に出かけて行って、再び地上（内）に帰ってくる物語です。主人公は、（内→外→内）と移動することになります。2つ目はかぐや姫型で、月（外）から来たかぐや姫が竹から生まれて地球上（内）で生活し、再び月（外）に帰って行く物語です。主人公は、（外→内→外）と移動することになります。3つ目は成長型で、物語では最も多い型であり、子ども（外）が大人（内）へと成長するものが一般的です。主人公は、（外→内）と移動することになります。4つ目は退行型で、成長型の逆の型であり、例えば大人（内）が子ども（外）になったり、都会（内）から田舎（外）へ移動したりする物語です。主人公は、（内→外）へ移動することになります。



図

そして、図には書かれていませんが、5つ目の型として、「オープン・エンディング」という型があります。これは、終わりがはっきりとした結末になっていなくて、この後どうなるかが読者に告げられていないまま終わる物語のことをいいます。すみ江の人生の後半がどうなったか語られていないまま終わる『鶴凍えず』は、オープン・エンディングにあてはまるといえます。

『読者はどこにいるのか』では、オープン・エンディングについて、「日本では明治40年頃の自然主義文学最盛期に確立された型だ」とし、次のように述べられています。

物語は「はじめ」で提示された課題が「終わり」で解決することで物語となっている。しかし自然主義文学は、日常生活はそんなうまい具合に結末を迎えるわけではないし、物事が解決するわけでもないと考えた。そこで、物語を作りすぎることを批判して、日常生活を何気なく切り取ってきたようなはっきりとした結末のない小説を好んで書いた。それが結果としてオープン・エンディングという技法の確立につながったのである。

つまり、オープン・エンディングを用いることで、作りすぎない小説を書くことができるということです。これは、2で述べた『鶴凍えず』を<作りごとでないもの>として読者に読ませようとした」という考え方とも一致します。

よって『鶴凍えず』は、<物語を作りすぎず、日常生活を何気なく切り取ってきたような物語である>と、読者に感じさせる工夫がされた小説であるといえます。

4 まとめ

3でも述べましたが、島田杏花「『鶴凍えず』について」では、『鶴凍えず』ですみ江の人生の前半しか語られなかった理由を、＜人生の後半についてはまだ時効になっていなかったからである＞としていました。このことを北沢のモデル小説のルールの一つであるとし、表現の工夫という観点からは分析されていませんでした。

また、島田杏花「『鶴凍えず』について」の他に、『鶴凍えず』先行研究として挙げられるものに、三木ふみ『北沢喜代治一人と作品』があります。『北沢喜代治一人と作品』では、『鶴凍えず』の表現の工夫について少し触れられていますが、それは「会話の入れ方」や「自然描写の取扱い」という面からであり、「ストーリー/プロット」と、「物語の型」という観点からは分析されていませんでした。

今回は、先行研究では触れられていなかった、「ストーリー/プロット」と、「物語の型」という観点から『鶴凍えず』を分析することで、『鶴凍えず』は＜物語を作りすぎず、日常生活を何気なく切り取ってきたような物語である＞と、読者に感じさせる工夫がされた小説であると導き出すことができました。よって、『鶴凍えず』の表現の工夫を、新たに読み開くことができたと考えています。

○この原稿を書くにあたり、神奈川大学教授 松本和也先生にご指導いただきました。この場を借りて感謝の意を表します。

○参考文献

- ・北沢喜代治『鶴凍えず』（信州書房発行、1965）
- ・島田杏花「『鶴凍えず』について」（『屋上』48号、1981）
- ・三木ふみ『北沢喜代治一人と作品』（「屋上」の会発行、2007<非売品>）
- ・石原千秋『読者はどこにいるのか』（河出書房新社発行、2015）
- ・松本和也『テキスト分析入門』（ひつじ書房発行、2016）